

2023年9月

課題本 『小倉遊亀 天地の恵みを生きる 百四歳の介護日誌』

小倉 寛子/著

文化出版局

1999年

◆◆◆9月の読書会から

先月の「つながる読書会」の感想文を読んで感じたことから始めました。他の人が選んだ本で読んでみたいものがあったという声や実際に手に取って見たという人もあり、つながる読書は参加者へそれぞれの広がりを見せていました。

今月の課題本『小倉遊亀 天地の恵みを生きる』は105歳まで生きた日本画家・小倉遊亀を支える医療・看護・介護 3本柱のケアについて書かれた本です。著者は小倉遊亀の孫娘・小倉寛子。著者が実践した介護とは、彼女が介護をする人に求めたものとはどんなものだったのか。祖母の生い立ちや血のつながりがない家族ができるまでについてもかかれています。

参加者からは「このような介護を受けたいか」「小倉遊亀だからこそ受けられたサポートではないか」「記録が多く、管理された印象。自由はどこへ」「この本の中でできるところを取り入れていきたい」「介護者を見ることで学びがある」など様々な感想ができました。介護という身近な題材でもあり、自分だったらどのような対応を望むか、これまで経験した介護の話など、いつも以上に参加者の発言が活発だった読書会でした。

(文責:森下)

『小倉遊亀 天地の恵みを生きる』を読んで

◆【 TK 】

日本画家の介護日記でした。タイミングよく少し前に朝日新聞に取り上げられて絵もカラーででていました。それをみせてもらったのですが私はいつも新聞をとっておきながら見過ごしている。前にもこんなことがありました。読書会の本が膨大な中から選ばれているのにちゃんとタイミングよく新聞に取り上げられていることがある。それなのに読んでいないことに気がつき、最近ではすかさず新聞を読む時は必ず文化面をみることにしています。

小倉遊亀は日本画でありながらピカソのような思いきりのいい線を感じる。洋画にも見える。こんな絵に出会えて嬉しく思いました。

介護日記は 生い立ちからどんな家かとか、食事 症状 医師 お手伝いさん迄克明に記録が書かれています。

著名な医師 お手伝いさん 別棟のお家はかなり裕福であることがわかる。お金があるから何でもできるし、この本を書いてお世話をしている親族のかたも小倉さんの仕事の一貫のように仕えている。

私はこの本は 小倉ファンのために記念としてビジネスとして書いていると感じました。確かにこんな絵を書く人にはファンが沢山いるはずです。

それにしてもあまりにも熱が出たとか服とかかなり詳しく介護の記録をしています。こんなことまで一般のひとは別に知りたいとも思わない。これは親族が歴史に残そうとして書いているのだと思いました。ですから介護の参考にするにはあまりにも次元が違いすぎると感じました。

著名な医師からの名言を授かっていますが、一般のひとはにはそういうことは本から読むのでしょ。

私は絵をみるだけで十分でした。

◆【 T 】

小倉遊亀は日本を代表する女性画家で、97 才で倒れるも熱心な介護により再び筆を持ち絵を描き始めた。副題に、「百四歳の介護日誌」とあるように、倒れた後、孫の寛子さんが関わった介護の話である。

遊亀が倒れた後、仕事をやめて介護に関わるようになった著者は、医療・看護・介護、この三つの柱がそれぞれの分野で健康を支えていて、どの柱も、祖母のケアにとって不可欠と見え、この三者を仲介するものとして、また、介護をする人たちにも日々の様子を共有してもらうために介護日誌を作った。日誌には、おむつ交換・水分補給・食事・介護者の気づきを記入していった。

介護をするとき、世話をしあげる・世話をしてもらうというような気持ちになり、介護者と被介護者の間の対等な人間関係が崩れがちであるが、著者は、介護するとき、まず声掛けをし、何をするか伝え、本人にも理解してもらう。時にはそのために話し合いもしていたという。また、限界をきめない介護が大切と考え、先入観を持つこと(高齢者だから・前は出来たから、あるいは出来なかったから等)なく接するようにした。人間の尊厳を守った素晴らしい介護だと思う。

しかし、本の中で、水分の取り方・声掛けの仕方・献立等について、介護者のしたことで納得のいかないこともたくさんあったように書いてある。著者自身は直接携わることが諸事情で難しく、介護職の方たちに祖母の介護をゆだねたが、著者の考える介護と介護者のやり方が異なっていたためだ。

私も介護をしたことがあるが、介護は、試行錯誤の繰り返しであり、日により、体調により、気分により変わるものではないかと思う。また、介護する人とされる人との関係性によっても変わるものだと思う。こうしなければならない、これは間違いと考えると大変窮屈な介護になるのではないだろうか。その時に良いと思うこと、その時に出来ること(介護者・被介護者共に)をしていけばよいのではないかと思った。

◆【望月悦子】

今回の課題本は、参加者全員に身近な切実な問題としての意識が強いからか、にぎやかな話題へと発展しました。多種多様な考えが聞けて読書会の妙味を痛感し、この作品のどこに視点を当てるかによって読み解き方が異なることが分かりました。

ひとつには、文化勲章受章者で作品を描き上げるごとに多額な収入を得る特別な人。二つには管理されず高齢者としてゆったりと過ごす。の2点に集中したように思いました。でもそれだけだろうかと思いました。幸い、今回の担当者が用意して下さった資料にある「石井信平(映像&出版プロデューサー)氏の『ここにきて本書は、単なる介護本とは違う、小倉遊亀という稀有な芸術家の人間記録』という視点からまとめてみたいと思いました。

この作品は、血の繋がっていない孫娘(小倉寛子)が「小倉遊亀・天地の恵みを生きる一百四歳の介護日誌」として完成させていますが、作品の前半は、遊亀の画家として成功するまでの養育・生育がまとめられ、並の人間では計り知れない苦楽の中で、芸術家としての素地が育まれてきたのかということが分かります。山岡鉄舟の春風館道場に入門し千日修行した夫小倉鉄樹73歳 遊亀43歳のとき結婚しています。「夫小倉先生から私一人では通れないような所も通らせていただき、絵の上でもそれは幸せでした。一生独身で絵を描くなんて愚の骨頂、結婚して描けないような絵なら一人でいたって描けません」と素晴らしい厳しい伴侶にも恵まれ、より一層自分自身を厳しく磨き始め強固な自身の一本筋のしっかりした人格を創り上げていったのではないかと想像します。「絵描きというものは、政策第一、自らの命を削ってでも絵を描きてゆきたいと思っているし……「描きたい」という気持ちが生まれてしまうと、絵描きの肉体はその気持ちに突き動かされ責め立てられるというようなところがある」という祖母を筆者は、日本画家の巨匠というだけでなく、家族の一人として敬愛しているのだと思いました。遊亀が退院して「自宅での食事の時、別人のよう。住みなじんだ空間がどれほど人を和ませるのかを改めて感じさせた経験である」そこから一層、何とか彼女の思いに添いながら彼女らしく生きてほしいという願いが、自宅での介護・看護・医療につながったのだと思います。彼女の素晴らしい点は、介護・看護しながら自分も学び成長しているということ。「看護師さんとの出会い その人に残された能力をいかに引き出してゆくかという基本的な介護の考え方を私に気付かせてくれたし、本人が理解してから行動をとることの意味もあらためて教えられた」とか、「情緒的な記録はせず、祖母の言葉などをなるべくそのまま書くように心がけた」に始まり「水分は、入れることも出すことも大切な命のポイントだと思った」から排泄の手厚い介護も始まっています。「おむつにもいろいろな形があり使う人の体力や体形に合わせて選ぶ必要がある。我が家のは大判の平面状の物を使っている」遊亀の体形を考えると肯けます。更に「1回目のおむつ交換のときは、布団をかけたまま手探りでおむつカバーをはずして、このシートだけ引き抜く。2回目の時は同じように2枚の大判おむつのうち1枚だけを取る。こうすれば深夜に寒い空気に肌をさらすこともない。そして朝方ともなればだいぶ眠りも浅くなっているから、体の向きを変えながらのおむつの交換ができる」ここまで徹底して介護ができるだろうか。

筆者は熱い祖母の希望『昨日の繰り返しではなく、今日しかできないことをしたい』ことを叶えたいと願っていたのではないかと。だから高齢ではあっても病人ではないのに「お大事に」という言葉は不適切と嫌っています。しかし歳をとるってことは本人にとっては悔しいに違

いない。私はそう思っているから。でも遊亀の違うのは「諦めないで待つ」姿勢にあるようだ。101歳で描き上げたマンゴーの絵も「マンゴーが喉まで来ているんだけど・・・」若いころのように感性が沸き上がってこない。描けない高齢者の気持ちが痛いほど悲しいほど分かり、自分の今の能力ではどうにもできないもどかしさを時間のかかるもどかしさを「描かせたいんでしょう」と家族や看護師たちの一生懸命さにそうは問屋が卸さない、描くのは私と言わんばかりに皮肉っぽく対応しているのが、歳をとっても彼女らしいと愉快地に思える一方、切なさが増す思いがします。そういうやり取りのなかでも描きたい気持ちが生まれると完成させています。彼女のことを稀有な芸術家と言われる所以だと思いました。

遊亀の最後まで力強く艶やかな其れでいて暖かい彩色などは、家族の愛情の強い絆が大きいと思いましたが、遊亀本人も「天地の恵み」を貫徹できた環境の下で、彼女らしく生き抜けたことは幸せな人生だったのではないかと思えました。

この作品から私は何を学べたのだろうか。特別で別格な人の老後と捉えるだけではなく私の残された時間を「楽しく充実した生活にしていく」ために、聖路加国際病院名誉院長日野原重明先生の「生活のしるべ」を参考にしようと考えました。

一 水、牛乳を飲む 二、出かけて友と語り大笑いする 三、手足、指のストレッチと散歩
四、毎日お風呂かシャワー 五、毎日一回はパソコンに向かう

を私の生活の日課にしたいと整理しました。さらに、精神面では「祖母の『ありがとう』には、人が元来持ち合わせている「誰かの役に立ちたい」という善意を呼び起こし、人に自分のなにものかを与える喜びを思い起こさせてくれる力がある」という言葉からそんな意味を含んだ『ありがとう』が言えるように努力したいことと「何も持たぬという人でも天地の恩は頂いている遊亀 100歳」の言葉に励まされて生活し続けたいと改めて考えることができました。

今回もこの作品に出会えたことと担当者の準備に感謝です。

◆【 MM 】

今月の課題本は、1992年に97歳で脱水と栄養失調で倒れてからこの本が出版された1999年(小倉遊亀104歳)の間の介護の記録を中心に、遊亀の人生や彼女をとりまく家族(といっても血のつながりはない)についても書かれた本である。小倉遊亀は105歳で没しているので彼女の死までこの献身的な介護が続いたのだろうと想像する。献身的といっても一人が遊亀についたのではない。医療・看護・介護を担う「チーム遊亀」の人々が彼女を生かしたと思う。

医療・看護・介護の3本柱のうち介護はなかなか安定せず、いろいろな人が来て、去っていった(辞めさせられた人もいた)。筆者である遊亀の孫、小倉寛子が求める介護についていける人とめぐりあうのは難しいだろうなあ…と思った。(寛子が思う)適切な介護+遊亀の食事を作る+食事内容やその日の遊亀の様子、摂った水分量に排せつ量の記録。介護ノートは70冊を超えたという。

私がこの本を読んで思ったのは、ここまでの介護を続けるのは金銭的にも精神的にも大変だ、ということだ。当日読書会に参加して気づいたのは、私は筆者寛子の視点でこの本を見ていたという点。介護される側よりする側の方に年齢が近いからか、ここまでの介護をするには大変だ…と介護「する」側の感想しかもっていなかった。読書会では、介護される身になったら…という点でも意見がたくさん聞けて興味深かった。参加者から私に「MMさんはどんな介護を望む？」と聞かれたとき具体的には答えられなかった。

読書会ではタイトルにある「天の恵みを生きる」とはどういうことか、という話にもなった。「画家小倉遊亀として天寿を全うする」、「もう一度絵を描く(養子の息子に先立たれてからしばらく絵を描けなかった)」などの意見が出た。私は天の恵みは小倉遊亀にだけ与えられたものではなくて、それぞれ、私にも、誰にでも与えられていると思う。画家・小倉遊亀は類いまれなる才能を持っていたのかもしれないが、人間・小倉遊亀として晩年はどう生きたかったのかを本人に聞いてみたい。

生きたのではなく生かされた、管理された、という意見を聞いた時はなるほど！と思った。気落ちしたままではなく何とかもう一度絵を描いてほしい、という筆者の気持ちはわからなくもないが、絵筆を持つようになるまで手を変え品を変え、寄り添いながら、励ましながらい「描きたい気持ち」になるまで根気強く付き合う…終わりが見えないことに私だったらどこまで付き合えるのか…。介護は身近なことでもあるし、介護する側、される側、どちらも経験する可能性はある。大いにある。だから今月は参加者それぞれが思うことがあっていろいろな話が聞けて良かった。会の終わり頃には今回の本に対して前向きに受け止める気持ちになれた。